



episode.09

トビウオ漁に迫る

話し手 漁師

しげい き なおひで
重久 直秀さん (昭和25年9月20日生)

聞き手 鹿児島県立屋久島高等学校 1年

岩川 翔也 門屋 龍青
大迫 照栄 日高 源
鈴木 太郎 恵 多金良

「トビウオ漁を始めたきっかけと漁の仕方」

大島の与論町出身、名前は重久直秀72歳です。1950年、朝鮮戦争のときに生まれました。与論では食べていけませんでしたが、屋久島ではトビウオが獲れると聞き、母方のおじがここで漁師をしていたため、漁師を始めました。うちの両親も漁師をしていましたし。中学3年生の時に進路が決まらず、これはいかんかと思っていて、そんなときにトビウオ料理を食べて、とてもおいしくて、たくさん食べたかったのでトビウオ漁を始めました。

日没から夜明けくらいまで漁に出て、夕方仕掛けて朝に獲る。昔は5~6人で行っていたんですけどね、今では船とか網が良い物になってきたので人をできるだけ減らして、ほとんどが4人かな。長さが1,000メートルくらいある「おどし」という網を使って漁をします。

「トビウオ漁の苦勞」

漁のコツはね、とにかく魚がいるところに自分が行くこと。どんなに立派な道具、仕切り網だけども、その技術を身に付けるのも漁師たちが一生懸命しないといけないだけどもね。魚探だよ。できれば同じ場所で漁がしたいけど、そううまくはいかない。相手は生き物だから、自分の船の舵の動かし方とか、いろいろとあると思う。潮の流れは、今は潮流計という機械でも分かる。機械が無いときは、山勘、長年の勘で行き先を決めてたね。



「1匹当たりの値段」

トビウオの一匹当たりの値段は、何種類かあるんだけどね、瀬見獲りっていうやつで獲れた魚が、一匹当たりが20円ぐらいだと思うんだけど。昔はお金にもならなかった。仕方がなかったんですけどね、当時は大体10円でね、島外に出荷だったんですよ。

「何故、後継者がなかなか現れないのか」

はっきり言って賃金ですよ。生活がありますからね。人間食べていかなければならないしな。ただ面白いとか、やりたいだけでも経営としてどうかと思うし、第一やっつけられないからね。それを乗り越えるためには養殖とか手段は限られてくるんだけどね、これがまた養殖ってのも難しい。屋久島の地形的にね。なんとか知恵を出して、ずっとトビウオ漁を続けていきたいですね。

